

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：ひゃくえむ

4 回目

今回のテーマ

I. スポーツアニメの変遷とひゃくむ

II. 子ども時代のトガシと小宮の交流について考える

III. 高校時代のトガシと小宮について考える

I. スポーツアニメの変遷とひゃくえむ

これまで1960～70年代の「エースをねらえ!」、2010年代の「ハイキュー!!」と扱ってきた。両者と「ひゃくえむ」が異なる点は、100m走という競技を通じて「なぜ走るのか」「なぜ生きるのか」という実存的な問いに踏み込む作品であるということである。この作品は「エースをねらえ!」にみられる父性の導きも「ハイキュー!!」にみられる母

性的な抱えもない裸の個として、生きることの意味をどう掴み取るのかが問われている。

II. 子ども時代のトガシと小宮の交流について考える

きょうだいトラウマにおけるトガシと小宮

幼児にとって母との関係は世界のすべてであるが、新しい赤ちゃんの誕生によりその独占的な関係は永遠に失われる。この時、子どもの心には赤ちゃんを排除したいという激しい衝動が生まれる。そのトラウマ的情緒をジュリエット・ミッチェルは、きょうだいトラウマと名付けた。親子関係の垂直軸（父の法）に対し、きょうだい関係という水平軸に着目した（母の法）。それは「排除したい相手と共に生きる」ことを求めるものでありその根底には喪失の受け入れという痛みが伴う

トガシと小宮は走ることを通じて、ある種きょうだいとなった。トガシは速いが走ることに何も見出しておらず、小宮は痛みで痛みを打ち消す自傷的な走りをしてきた。しかし互いの存在によって走るものの質が変わり始める。ここにきょうだいトラウマの構造が現れる。小宮の台頭はトガシの存在を脅かすが、同時に小宮がいるからこそ走ることに意味が芽生える。この両価性がきょうだい関係の核心である。しかし小宮の突然の転校により、きょうだい葛藤に向き合う機会すらないまま関係は断ち切られた。トガシには処理されなかった喪失が、小宮にはトガシを追い越すことへの無意識的な恐れが残った。その二人が高校生になり、インターハイの決勝で再び同じ舞台に立つ。

III. 高校時代のトガシと小宮について考える

1) 登場人物紹介

浅草 葵（あさくさ あおい）：トガシが通う颯第二高校陸上部の先輩部員。競技の才能には恵まれていないが、陸上に対して人一倍の熱い想いを持っている。廃部寸前の弱小陸上部にあっても、その情熱は失われることがない。トガシの中に眠る可能性を感じ取り、陸

上部へと勧誘する。葵にとってトガシの速さや実績は関係なく、ただ走る存在としてのトガシを受け入れ、求めた。その姿勢が、走ることに意味を見出せなくなっていたトガシに再び走り始めるきっかけを与えることになる。

仁神 タケル (にがみ たける)：100m 元日本代表の親を持ち、中学時代には陸上界のスター選手として名を馳せていた。トガシが小学6年の頃、その活躍は広く知られていた。しかし常に勝つことを求められる重圧に押し潰され、走ることをやめてしまう。数年後、トガシが進学した鰯第二高校で陸上部の幽霊部員となっていた。偉大な父の影のもとで、走ることが父の期待に応える行為でしかなくなり、走る喜びを失ってしまった青年である。

2) ウィニコットの潜在空間 (potential space)

イギリスの精神分析家 D.W.ウィニコットは、人が創造的に生きるために不可欠な心の領域として「潜在空間 (potential space)」という概念を提唱した。

潜在空間とは、内的な空想の世界と外的な現実の世界の間にある「第三の領域」のことである。子どもの遊びを思い浮かべるとわかりやすい。たとえば子どもが棒切れを剣に見立てて遊んでいるとき、子どもはそれが「本当の剣ではない」ことを知っている。しかし同時に、遊んでいる間はそれが「剣である」という体験に没頭している。これは空想でもなく現実でもない、その間にある独特の体験の領域である。

大人にとっても、この潜在空間は生きる上で欠かすことができない。たとえば音楽に没頭しているとき、スポーツに夢中になっているとき、人は現実を忘れているわけではないが、現実の重さから一時的に解放され、生き生きとした感覚の中にいる。ウィニコットはこの体験を「遊ぶこと (playing)」と呼び、人が本当の意味で自分自身でいられるのは、この潜在空間の中においてであると考えた。

ただし、潜在空間は一人で作り出せるものではない。ウィニコットが強調したのは、この空間が生まれるためには、安心して遊べる「抱える環境 (holding environment)」が必要だということである。赤ちゃんが母親に抱えられることで安心して遊び始めるように、人は誰かに受け入れられ、支えられているという感覚があって初めて、潜在空間の中で創造的に生きることができるのである。

3) 潜在空間の萌芽と父性的対象の世界

①トガシのケース

高校に入り、走ることをやめていたトガシを変えたのは、浅草葵の存在であった。廃部

寸前の弱小陸上部でただ一人、陸上への情熱を燃やし続ける葵は、トガシに走ることを求めた。しかしそれは、速さや結果を求めるものではなかった。葵はただ「100mを走るトガシ」という存在を受け入れたのである。

この受け入れが、トガシにとっての抱える環境 (holding environment) となった。子ども時代、トガシは「速い子」として周囲から一目置かれていたが、それは能力に対する評価であり、トガシという存在そのものの受容ではなかった。しかし葵に抱えられることで、トガシの中に潜在空間が芽生え始める。走ることが、誰かの期待に応えるための行為でも、意味を問われる行為でもなく、ただ無心に没頭できる「遊び」になったのである。後に海堂が「現実逃避」という言葉で語ることになるものの原型が、ここにあったと考えられる。ただしこの時点ではまだ言語化には至らず、トガシはそれを一つの感覚として掴んだにすぎない。

②エディプスコンプレックス——父を超えること、父に潰されること

ここでエディプスコンプレックスについて触れておきたい。エディプスコンプレックスとは、ギリシャ神話のエディプス王の悲劇になぞらえてフロイトが提唱した概念である。エディプス王は知らずして父を殺し、母と結婚するという運命を辿った。フロイトはこの神話に着想を得て、乳幼児期から子どもは無意識に異性の親の愛情を得ようとし、同性の親に対して嫉妬と競争心を抱くという心の葛藤を理論化した。この葛藤は4歳から6歳頃に現れ、潜伏期に一旦抑えられるが、心身の成長が著しい思春期に再び強く出現するとされている。

エディプスコンプレックスの核心にあるのは、「父を殺したい」という衝動と、その禁じられた願望に対する処罰への恐怖の間で引き裂かれる葛藤である。子どもは成長の中でこの葛藤と向き合い、やがて父を打ち倒すのではなく、父の存在を認めながら自分自身の道を歩いていくという形で乗り越えていく。しかしこの葛藤が過度に強い場合や、向き合うための心理的な余裕がない場合、子どもはこの葛藤に押し潰されてしまうことがある。本作では、このエディプス葛藤が仁神と父親の関係に現れるだけでなく、小宮とトガシの関係にも現れ、小宮の高校時代の葛藤へとつながっていく。

③仁神タケルの挫折と復帰——エディプスコンプレックスに潰された走り

仁神タケルは100m元日本代表の父を持つ。幼い頃から父の背中を追い、父の期待に応えるように走ってきた。仁神にとって、父の期待に応えることと父を超えることは矛盾していなかった。父の教え通りに走り、父の求めるものに忠実であれば、いずれ父の記録に

到達し、それを超えられるはずだと。父の法に従うことがそのまま父親殺しへの道になるという、ある種の無邪気な信仰がそこにあったと考えられる。

しかし高校生になり、身体が父と同じ大人の体に近づいていく中で、現実が突きつけられる。父の期待通りにやっても、父には届かない。父の法に従うことが父を超える道だと信じてきたのに、その道が行き止まりであったと気づいたとき、仁神の中ですべてが崩れたのではないだろうか。思春期にエディプス葛藤が再燃する中で、走ることは否応なく父との比較の場となり、同じ競技、同じ距離の記録が数字として残酷に突きつけられる。かといって父の法に背いて自分独自の走りを探すという選択肢は、仁神にはなかった。父の法の外に自分の走りを見出す場所がない。だから走ること自体をやめるしかなかった。

しかしトガシと走ったことで、仁神に変化が起きる。トガシに誘われて走った100mのタイムは12秒13。アスリートとしては凡庸な記録であったが、仁神にとっては、父の重圧から解放された場所で「自分はまだ走れる」という身体との再会であった。そしてトガシと横に並んで走るという体験の中に、父の期待も評価も勝敗もない、走ること自体の手応えがあった。勝敗が絶対的な意味を持つ父の法の世界では、負けることは挫折でしかない。しかしトガシとの間に生まれた潜在空間の中で、仁神は父の法に支配されていない走りを初めて体験し、陸上部への復帰を決意し、再び走ることに人生を賭けていくことになる。

④小宮のケース

小宮は九州の名門校で陸上を続けていたが、中学時代の怪我が癒えた後も全力で走ることができないでいた。この恐怖の奥には、トガシを追い越すことへの無意識的な恐れが身体の次元に現れていた可能性がある。

転機を与えたのが財津との出会いであった。財津の講演で小宮は自ら質問に立ち、怪我が治ったのに全力が出せないと打ち明ける。財津は「不安とは君自身が君を試す時の感情だ」と語りかけ、「やりたいことはなんですか?」と問う。小宮は咄嗟に「日本記録を塗り替えることです」と答えた。この瞬間、小宮はトガシに代わる新たな父性的対象を財津に見出したのである。「日本記録を塗り替える」という宣言は、身体の次元で止まっていた父親殺しの不安を、記録という目標の形に変換し前に進もうとする試みであった。

財津という父性的対象を得たことで、小宮はトップスピードに乗る怖さを克服し、記録は飛躍的に伸びていく。しかしその急速な台頭は先輩の経田の嫉妬を買い、小宮は孤立していった。横に並ぶきょうだいとして共に走る関係ではなく、妬みと排除の対象になる。皮肉にも小宮は、きょうだいとの関係を通じて潜在空間を作る機会をここでも得られない

まま、より一層孤独な道へと進んでいく。

ここにトガシとの対照が浮かび上がる。トガシの高校時代には葵という抱えの存在があり、仁神というきょうだいがいた。彼らとの交流はトガシにとって潜在空間となり、走ることの喜び、意味を見出していった。一方の小宮には、そのような存在がない。父性的対象がトガシから財津に変わっただけで、理想化された対象を見上げ乗り越えるという垂直的な関係の構造自体は変わっていない。走ることの意味は「記録を塗り替えること」に集約され、小宮は一人孤独に、記録という数字だけを相手に走り続けることになる。そしてインターハイの決勝で、小宮は再びトガシと対峙する。

4) トガシと小宮の再会 処理されなかった喪失の重さ

インターハイの決勝、雨の中で二人は再会する。子ども時代に突然断ち切られた関係が、晴れやかな舞台ではなく雨の中で再び結ばれるということが、処理されなかった喪失の重さを暗示している。

決勝でトガシは小宮に敗れる。しかし走り終えた後、小宮がトガシに告げたのは「トガシくん、走り方、変わったね」という失望の言葉であった。小宮はずっとトガシを父性的な理想化された対象として追いかけてきた。「あのトガシに追いつき、追い越す」ことが小宮の走る意味であった。しかし目の前のトガシは、かつての走り方をしていない。葵に抱えられ、潜在空間の中で走ることを覚えたトガシは、小宮が追い求めていた「あのトガシ」とは別の存在になっている。

小宮はトガシに勝った。しかし勝利は空虚であるように感じられる。追い越すべき理想化された対象がもうそこにはいないのだから。「100mを誰よりも速く走れば全部解決する」というテーゼそのものが、この瞬間揺らぎ始めるのである。